主張

オリンピック・パラリンピック

梶原　敏

四年に一度のスポーツの祭典、「オリンピック・パラリンピック」。これまでの大会の様々なシーンや選手の残した言葉が、心に刻まれています。昨年の暑い夏をより熱くしてくれたリオ五輪では、日本は四一個という過去最高のメダルラッシュに湧きました。中でも、内村航平選手の圧巻の体操演技。四連覇達成と選手団の団長という重責を担っていた女子レスリングの吉田沙保里選手の言葉、「金メダルをとらないといけないのにごめんなさい」。また、バルセロナとアトランタの二大会連続のメダルに輝いた、我が郷土岡山の有森裕子選手の全身全霊で走り抜いた言葉、「初めて自分で自分をほめてやりたい」。

一方、ソウル五輪の男子一〇〇ｍで世界記録を出しながらも、ドーピング検査で世界記録と金メダルを剥奪されたカナダの陸上選手。さらに遡れば、政治的理由からモスクワ五輪への出場をボイコットした日本の対応に、涙ながらに出場を強く訴えた男子レスリングの高田裕司選手の無念の言葉、「これまでの四年間の苦労は一体何だったのか」等々。

これまでの数々のオリンピック・パラリンピックを紐解いてみると、その裏には、その時代の世相や社会変化等を映し出す暗い影が見え隠れしています。戦争、動乱、人権問題、テロ、政治的動きの数々、薬物問題や行き過ぎた商業主義等。そうした「負の遺産（レガ

シー）」を今後どのように解消していくのか、気になるところです。

オリンピック・パラリンピックの理念は、「スポーツを通して文化や国籍などの違いを越え、フェアプレイの精神を培い、平和でより良い世界を目指すこと」。このことは、教育基本法や学校教育法における教育目標、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」にもつながるものです。現在、オリンピック・パラリンピック教育が施され、多様性への理解、語学教育・国際交流、伝統・文化理解、ボランティア、体力向上、環境教育等への取組の重要性が叫ばれ、実践されています。

確かに、こうした教育がもたらす子供たちの成長や変化は、社会全体を変えていく可能性を秘めています。特に、ボランティアマインドの醸成や障害者理解の促進は、共生・共助社会の形成につながっていく原動力そのものです。ただ、私たち大人がどんなに立派なデザインを描いても、私たち大人の価値観、日々の生き様や言動が、未来の宝である子供たちの良き鏡でなければなりません。最近、信頼関係を平気で断ち切る様々な報道、大人社会の利己的な商業主義、虚偽的差別的な言動等が横行し、日本のレガシーとも言うべき「情」や「恥」の文化が崩れかけているような気がしてなりません。どんなに時代が変わり、情報通信技術等が進歩しても、「人は人の中で育つ」と言われるように、教育の本質的な不易を決して見失うことなく、私たち大人が嘘のない正義感に満ちた教育を貫いていかなければなりません。そして、身近な「人と人とのつながり」や「多様性の認め合い」を大切にした日々の教育実践の積み重ねが、「共生社会の実現」や「世界平和」につながるものと信じています。

（全日中副会長・岡山市立西大寺中学校長）